

パキスタン国の基礎情報

【パキスタンの基礎情報】

パキスタンは正式名称を『パキスタン・イスラム共和国』と言い、インド、アフガニスタン、イラン、中国と国境を接している。連邦制を採用しており、北西辺境州、パンジャブ州、シンド州、バロチスタン州の四つの州とノーザンエリア、アーザード・ジャム・カシミールとイスラマバードの三つの連邦直轄地域から構成されている。首都イスラマバードは、イスラマバード連邦直轄地区に属する。

パキスタンの面積は79万6千km²で日本の約2.2倍。北部にはK2など8000m級の山々が連なり、美しい景色が広がっている。人口は1億5800万人で、人口密度は198人/km²。一人当たりの国民所得は520ドル。隣国と比較してみるとイランが2100ドルであるから、他の隣国のインド（540ドル）、バングラデシュ（400ドル）とならんで、パキスタンも低所得国の一つである。また、国内の貧富の差は大きい。平均寿命は男性が62.8歳、女性が63.2歳。合計特殊出生率は4.5人で、人口は年1.9%の割合で増加している。言語はウルドゥー語が国語で、英語が公用語である。ただし、ウルドゥー語を母語としている人は、人口の8%しかなく、例えばパンジャブ州はパンジャブ語、北西辺境州はパシュトゥーン語というように、地方によって異なった言葉が話されている。そのため、自分の出身地域の言語、ウルドゥー語、それに加えて英語というように、二〜三カ国語を話す人も少なくない。宗教は国名からも分かる通りイスラム教が国教で、人口の97%が信仰している。

【パキスタンの歴史】

パキスタンの歴史は古く、紀元前2600年から1800年にかけて、インド及びパキスタン南部のインダス川流域にモヘンジョダロを中心としたインダス文明が興った。紀元前3〜4世紀から6〜7世紀には、ガンダーラ文明が栄え、仏教美術が北西辺境州のペシャワール周辺に残っている。1526年にイスラム王朝が進攻し、ムガル帝国が成立。そのムガル帝国もイギリスが入ってきたことにより1858年に滅亡し、その後はイギリスの植民地となる。1947年インドとともにイギリスから独立。イスラム教の国としてのパキスタン、ヒンドゥー教の国としてのインドというように分離したため、現インド領内にいた多くのイスラム教徒がパキスタンへ、そして現パキスタン領内にいた多くのヒンドゥー教徒はインドへという大移動が起こった。

イギリスから分離・独立以来、政権交代は目まぐるしく、軍事政権が上手くいかなかったら文民政権、文民政権が行き詰ったら軍事政権、また軍事政権が上手くいかないということになれば文民政権と、軍事政権と文民政権が交互に登場している。現在のムシヤラフ大統領も、1999年に陸軍参謀長としてクーデターを起こし、政権の座に付いた。またこの間、1971年に東パキスタンがバングラデシュとして独立し、インドとはカシミール地方の領有権をめぐる三度戦争になっている。現在でもカシミール地方では毎日のように小競合いが続き、1999年には核戦争に発展するのではないかとはいうほど緊張が高まった。

【イスラム教とは】

イスラム教は610年頃、アラビア半島のメッカでムハンマドにより創唱された。唯一神アラーを信仰し、聖典はコーランである。五つの実行すべき定めとして『信仰告白』『毎日五回の礼拝』『断食(=ラマダーン)』『貧しい人への寄付(=ザカート)』『メッカへの巡礼』がある。

【パキスタンの女性の暮らし】

「イスラムの女性についてどんなイメージを持っているだろうか？」多分、黒いガウンのようなもの(=ブルカ)を身につけている様子ではないかと思う。パキスタンの場合、ブルカを着ている女性もいるが、すべての女性が着用しなくてはならないということではない。例えば、職場の同僚が結婚するまではブルカを着ていなかったが、結婚後はブルカを身につけ始めたということがあった。おそらく、結婚相手やその家族が要求したのではないかと推察される。

パキスタンでは、原則的に『男女席を同じゅうせず』である。学校は男女共学のところもあるが、ほとんどは男女別学である。驚いたのは、結婚式に招かれた時のことで、『男性招待客の部屋』『女性招待客の部屋』と男女が別々の部屋へ案内された。そして、結婚したカップルが両方の部屋に顔を出すという形になっている。しかし、すべての結婚式がこのような形態をとっているわけではなく、男女の招待客が同席する結婚式もあった。また、女性が単独、あるいは数人で歩いている姿をイスラマバードなどで見かけたが、一般的に女性は男性と同伴で外出することが好ましいとされている。女性の中には、冠婚葬祭以外はほとんど外出をしたことがない人もいる。識字教育プロジェクトに参加した女性が、「何十年ぶりかに家の外に出て、いろいろな人と話すことができ、うれしかった」と話したのは、印象的であった。

日常の買い物をするのは、男性である。したがってスーパーなどに行っても見かけるのは、家族連れか男性である。女性の服も男性が買って来るといった話を聞いたことがある。結婚はほとんどがお見合いで、結婚相手とは、結婚式までに数回会った程度とか、結婚式当日に初めて会ったというようなこともあるらしい。また、いとこ婚が多い。これは、部族や家族の絆が強いことや、できることなら土地等の財産を分割することなく、部族や家族の間で保持していきたいという意図があるようである。

もう一つ説明しておきたいことに『オナー・キリング(=名誉殺人)』がある。これは例えば、女性が親の意思に背いて自分で結婚相手を選んだり、夫以外の男性と親しくなったりした場合に、父親や兄弟や夫が家族や一族の名誉を守るために、女性に対して殺人を犯すことである。最近、国際的に有名になった下記のような事例がある。

◆ある村の貧しい若者(男性)が村の有力者の娘と一緒にいるところを誰かが見かけた。

↓

◆そのことが、有力者の娘及び娘の家の名誉を汚したと考えられた。

↓

◆娘の親戚等5人が、その貧しい若者の姉を集団強姦した。

このようなことが起こった場合、通常女性は泣き寝入りをするのであるが、被害者の女性は訴えた。容疑者は当初の裁判では無罪とされ、釈放されていたが、最終的に最高裁判所で有罪の判決が下った。

【服装】

ほとんどのパキスタンの女性が着用しているのが、『シャルワー (=ずぼん)』『カミース (=ワンピース)』『デュパータ (=スカーフ)』という三点セットの民族衣装である。この三つの中で最も重要なものは『デュパータ』で、髪あるいは胸部を覆うようにして身に着ける。『デュパータ』を着けてないことは、裸も同然と言われており、女性は家の中でも、よっぽど親しい間柄の人の前でしか、とりはずすことはない。

世界での教育についての動き

1948年、国連は『世界人権宣言』において、『教育は基本的人権の一つであり、初等教育は無償で義務教育でなければならない』と定めた。1967年には、国連が9月8日を『国際識字日』と制定した。教育の重要性は国際的に認識されていたものの、近年特にその重要性が着目されている。1990年にはタイのジョムティエンで『万人のための世界教育会議』が開催され、2000年までに『Education for All (=万人のための教育)』を達成しようという目標が定められた。しかし、その目標は達成することができず、2000年にセネガルのダカールで『世界教育フォーラム』を開催し、目標を2015年までに延長した。2000年には国連の『ミレニアム開発目標』が発表され、女性の教育の向上が目標のひとつに掲げられている。2003年からの10年間は『国連国際識字の10年』ということで、ユネスコを中心としてさまざまな取り組みが行われている。

現在世界では約1億人の小学校就学年齢の子どもが学校に行っていない。地域別に見ると、サブサハラ・アフリカが全体の40%、南・西アジアが30%と大部分を占めている。小学校の就学率を見ると、世界の平均が84.6%、先進国の平均が95.6%、発展途上国の平均が83.2%となっており、やはりサブサハラ・アフリカや南・西アジアでは低くなっている。就学率の男女差を見てみると、就学率の平均が低いと、男女間の差が大きいという傾向がある。途上国では、男女差は約7%で、パキスタンはその差が大きい国の一つである。

一方15歳以上の成人に目を向けてみると、非識字者の割合は、世界の人口の18%で、7億7100万人にもなり、その64%は女性である。地域別に見ると人口が多いこともあって、南・西アジアが全体の半分を占めている。成人の識字率も子どもの就学率と同様、サブサハラ・アフリカ、南・西アジアそしてアラブ諸国で60%台と低くなっており、男女の格差も大きい。

パキスタンの教育事情

【パキスタンの教育の現状】

パキスタンの小学校就学率は66%（男子82%、女子50%）であり、無就学児童

数は600万人にのぼる。現在の日本の小学校児童数が720万人であることから考えると、600万人というのがどれほど大きな数字であるかということが理解できるであろう。また、識字率は54%（男性66%、女性42%）であり、成人人口の約半分、数にして4000万人が読み書きができないということである。

【女性の識字率が低い原因】

女性の識字率が低いことについては、さまざまな要因が考えられる。パキスタンで一般的に言われていることをあげると、

①女性の教育に対する価値が低い

イスラム教では男女とも同じように教育は重要とされている。ところが、女子・女性が教育を受けることに反対する声が保守的な人や宗教リーダーに根強い。実際、保守的な北西辺境州で女子校が放火されるという事件が4～5件続いたことがあった。

②学校が近辺にない

パキスタンでは、小中学校の数が全然足りない。女性が単独で外出することが好まれないので、家の近くに学校がない場合、親は娘を学校に行かせたがらず、女兒が就学できない。

③女性の教師が好まれる

「男性の教師がいる学校に娘を通わせるわけにはいかない」という親が多く、女子児童には女性の教師が望まれる。しかし、女性の識字率が低い現状では、女性教師が不足している状況である。

④学校の設備が整っていない

「トイレがない」、「学校の周りに塀がないため、いつ何時誰が侵入してくるかわからず危ない」というような考えの親がいて、娘を学校へ送らない。

⑤教育の質が低い

これは女子教育に限ったことではないが、一般的に教育の質が低い。2～3年小学校へ通っても、読み書きができない状況では、親が学校へ行く必要はないと考えたり、子ども自身がやる気をなくして中途退学してしまうケースがある。

⑥経済的に困難である

無就学の原因として、最も重要とされているのが貧困である。そして、貧困は男児より女兒に対して大きな影響を与える。例えば、息子と娘がいる家庭であれば、将来家に残って両親の面倒を見る男の子と比べて、他家に嫁がせる女の子には教育をつけても何の見返りもないと考え、息子を優先的に学校へ行かせる。また、男の子は高校まで行かせるが、女の子は小学校までで十分だと考えることもある。

【パキスタン政府の取り組み】

パキスタンの憲法では、中学校まで無償の義務教育が保障されている。しかし、連邦制であるため、教育方針や実施方法が各州によって異なっている。現在、小学校までの義務教育を保障する法律がやっと各州で成立した段階である。国家の政策としては、『国家教育政策（1998年－2010年）』『教育セクター改革（2001年－2005年）』『“万人のための教育”達成・国家行動計画（2001年－2015年）』があり、その他

『10ヵ年開発計画（2001年-2011年）』や『貧困削減戦略文書』などにおいて教育の重要性が述べられている。

実際、パキスタンで『万人のための教育』達成のためにどのような戦略がとられているかと言うと、次のような二段階アプローチである。

◆非識字者になる入り口を防ぐ◆

“小学校の就学率を上げる←ノンフォーマル基礎教育プロジェクト”

公立の小学校の数が圧倒的に足りない現状の下で、新しい学校を建設し、そこで教鞭をとる教員を養成していたのでは、時間もお金もかかる。そこで、村々に住む教育を受けた女性に研修をし、その先生の自宅で寺子屋のような形態で小学校と同じ教育を行うというノンフォーマル基礎教育プロジェクトを実施し、教育の機会の拡大をはかっている。

◆非識字者を識字者にする◆

“識字教室の設立←成人識字プロジェクト”

学校へ行く機会がなかったり、中途退学をしたために、読み書きができない人を識字者にするため、識字教室を設立し、識字教育を行う成人識字プロジェクトを実施している。

この他、女性の教育向上のための対策もとられており、小学校教育の無償化、小学校での教科書の無料配布、小中学校へ通う女子生徒への補助金、成人女性のための識字教室などが例として挙げられる。

成人識字プロジェクト

成人識字プロジェクトはパキスタン政府が行っているものであるが、州ごとに実施されている。本日紹介する事例の対象地域はイスラマバード連邦直轄地区で2002年4月から2004年11月まで行われたものである。プロジェクトの対象年齢は15～40歳で、読み・書き・算数を6ヶ月間でマスターすることとなっている。成果としては、1430の成人識字センターを設立し、35725名の学習者が、コースを修了した。成人識字プロジェクトの実施には、主に次の三者がそれぞれの役割を果たした。

“連邦教育省”

- ・プロジェクトの遂行と、実際に識字センターを運営しているNGOの監督
- ・黒板や椅子、教科書などの無料支給
- ・教員研修の実施
- ・NGOへの監督料と先生への給与の支払い

“NGO”

- ・識字率が低く、識字センターを必要としている地域を探す
- ・その地域から先生（10年生卒業以上の資格を持つ人）を見つける

▼10年生卒業とは・・・小学校5年・中学校3年・日本の高校に該当する学校が2年の合計10年で、10年生修了時に資格試験がある。パキスタンでは、小学校に入学して卒業する子どもが男子で4人に1人、女子で5人に1人とされているので、10年生卒業試験に合格した人は、かなりの教育を受けたと見なされる。イスラマバードは首都であり、教育レベルが比較的高いが、地方では村人100人のうち、読み書きができる女性が10人以下のところもある。

・識字センターを最低月一回訪問し、授業の実施状況を確認する。

“先生”

・自分の家で、近所から集めた非識字者25人位を対象に、1日2～3時間程度、週に6日、6ヶ月間授業を行う。

識字教育は、男性にも行われている。政府のプロジェクトではないが、パキスタン南部の商都カラチでは、NGOが雇用主に働きかけ、工場内で労働者を対象とした識字教室を開設している。労働者が昼休みや就業後の時間を利用して、1日1～2時間、工場内で学習する。会社は労働者に識字教室に出席している時間分の給料を支給するし、教科書、鉛筆、教師の給与などの費用も負担する。工場内に非識字者がいると、作業場所を示すための看板を絵文字で表さなければならなかったり、機械のマニュアルを読めないということがある。このような労働者が読み書きができるようになれば、生産性が向上すると考えられるので、識字教室は労働者のみならず雇用者にもメリットがあるであろうから、奨励すべきである。

成人識字プロジェクトの評価調査

評価調査は2005年の3、4月に行った。調査の方法としては、調査業務の経験のある現地の女性を雇って、インタビューを行った。この成人識字プロジェクトは女性のみでなく男性も対象であったのだが、女性に重点をおいていたため、実際のところ男性対象の識字センターは少なかった。調査では、成人識字センターに通った学習者350名（うち男性16名、女性334名）と先生から回答を得た。

評価調査の目的は『成人識字センターの運営状況の検証』『6ヶ月の識字コースの修了後果たして識字者となったのか？』『識字センターへ通った動機は何だったのか？』の三つを明らかにすることであった。特に三つ目の質問について興味があった。パキスタン政府やNGOから「大人は識字になど興味がなく、識字センターに参加するよう人集めをするのに苦勞する」とよく聞いた。過去には『識字教室に通った人にはお金を出す』であるとか『非識字者に読み書きが出来るようになるように教えたら、一人につきいくらかの報酬を出す』というプロジェクトが行われたが、いずれもうまくいかなかったと報告されている。

この識字プロジェクトでは、当初6ヶ月間の識字コースの修了後、6ヶ月間の職業訓練コースを実施する計画であった。しかし、パキスタンの連邦教育省には職業訓練プロ

プロジェクトを立案・実施した経験者がなく、立案段階で時間がかかり、職業訓練コースはとうとう始められなかった。今回のプロジェクトの識字センターへ勧誘する際には、「識字コースの修了後には、職業訓練コースがありますよ」、「裁縫を習うことができますよ」というインセンティブが使われた。しかしながら、「どうもそういったコースは始まらないらしい」と人々が察知し、識字センターに人が来なくなったり、人が集まらなくなつたという報告を受けた。職業訓練修了後には小規模ローンの貸付が計画され『読み書きの学習をステップとして、収入を得る方法を習得することができる』という動機づけがなされたのであるが、結果的には上手くいかなかった。個人的には、人が学ぶ動機は経済的便益のみからではないであろうと考えている。その意味からも、女性がどういう動機で識字センターに通つたのかということをも明らかにしたいと思った。

【評価調査の結果】

①学習者のプロフィール

学習者の平均年齢は、28.8歳で、未婚者は43%で既婚者は54%。既婚者の子どもの数は平均約4人であった。未婚の20代前半までの女性と子どもが手を離れた30代後半の女性が多かった。職業をみると、パキスタンでの女性の労働参加率が2%と低い状況を反映して、家庭の外で職業を持っている女性はたいへん少なかった。家事労働に従事している人が63%、家事以外に牧畜などを行っている人が17%、その他家庭内でできる手工芸などの内職や、自営業、農業などに従事している人もいた。

②成人識字センターの運営状況

約10%の成人識字センターが6ヶ月間の期間の途中で閉鎖されていた。また、約20%の成人識字センターが毎日開かれていなかったり、きちんと機能していなかったことがわかった。その理由としては、『いったん引き受けはしたものの、家庭の用事が忙しい』『結婚』『出産』『引越し』『他に就職口を見つけた』などといった先生の事情、あるいは、『受講生がだんだん来なくなってしまった』という自然消滅などであった。出席率は約90%と高かったが、学習者の自己申告によるものなので、この数字の信憑性は定かではない。退学者の割合は高く、約25%の学習者が途中で識字センターに通うのを止めていた。主な理由としては『家のことが忙しい』『小さな子どもがいる』『妊娠や出産』『家庭内の問題』『病気』等が挙げられる。また少数ではあるが『識字センターが開始した後に、家族やコミュニティの反対により閉鎖してしまった』という回答もあった。

③テストの結果

今回の調査では、6ヶ月間の識字センターで学んだことの定着度を確かめる意味からテストを行った。識字センターで教えたのは、ウルドゥー語の読み・書きと算数、イスラム学(=宗教)の四科目であった。イスラム学が科目に選ばれた理由については、コーランを読みたいと希望する人が多いからだ、と、教育省の職員は説明した。四科目についての試験を行ったのだが、対象者の中にはキリスト教徒もいたので、ここでは基本的な識字能力としての『読み・書き・算数』の三科目についてのテスト結果について報告する。各科目5点満点で、三科目合計で15点満点の試験であった。平均点は、読みが3.4点、書きが2.5点、算数が1.6点で、合計7.5点であった。対象者のうち間違

いなく文章を書けた人は35%。流暢に教科書を読むことができた人は53%。算数は一番苦手なようで、満点の人が7%に対して、0点の人が37%いた。

その他、このテストを通じて二つの重要なことが分かった。一点目は、識字コースを最近修了した人の方が、一年前、二年前に識字コースを修了した人よりも平均点が高い傾向があるということ。せっかく読み書きを習ったのに、時が経つにつれ、忘れていていないのではないかという印象を受けた。二点目は、若い学習者は年配の学習者に比べて、はるかに平均点が高いということ。このプロジェクトの対象年齢は、15歳から40歳ということになっていたが、対象年齢外の人も多く含まれていた。テストの結果を年代別に分析してみると、35歳から40歳を境に、テストの平均点が大きく下がった。このことから、年齢が高い人は識字を習得するのに若い人より時間がかかるのであろうと思われた。

④識字センターへ通った動機

学習者が識字センターに通おうと思った動機を尋ねてみたところ、『何か勉強したかった(33%)』『先生を知っていた/先生に誘われた(27%)』『センターが家に近かった(11%)』『手紙や看板などを読めるようになりたかった(7%)』『こどもに勉強を教えたかった(5%)』『親戚や友達がセンターに行っていた(5%)』等であった。面白い話として「夫に手紙が時々届いているが、いったい誰から来ているのか、何が書いてあるのか全くわからないので、読み書きを勉強し、手紙を読めるようになろうと思ってセンターに来た」と話した女性がいた。

また学習者に成人識字センターに通うことによってどのような変化が生じたかについても尋ねた。教育を受けることによって生じる内的変化というものは、教育の便益を語るに際しあまり触れられないことであるが、重要なことであると考えている。というのも、読み書きを学ぶことは、単に読み書きの技術を習得するというだけでなく、そのことを通じてさまざまな能力が開発されることを意味するからである。この識字プロジェクトに参加したことで学習者は、『自信が持てるようになった(16.9%)』『以前よりよく話すようになった(14.6%)』『積極的になった(13%)』『自尊心が生まれた(11.7%)』と回答し、さらには『疑問を持ち、質問をできるようになった(7.8%)』『意見を述べられるようになった(7.7%)』『一人で出かけられる/以前より外出するようになった(6.4%)』等の回答もあった。

最後の質問として「識字センターに来て良かったか?」、「他の女性に識字センターへの参加を勧めるか?」、「勧めるならどのような理由で勧めるか?」を尋ねた。その理由は、この質問に対する答えが次に識字プロジェクトを行う際にどのように勧誘すればいいかのヒントとなると考えたからであった。結果は、『学ぶことができる(23.5%)』『子どもや他の人に勉強を教えたり、手助けができる(12.3%)』『生活が向上する(7.4%)』(=これは経済的な意味ではなく、例えば自分の生活の中で時間の使い方がうまくなる等のことを意味している)『自信・自尊心・独立心が持てる(7.1%)』『マナーが良くなる(5.4%)』(=ウルドゥー語も日本語と同様に敬語表現があるため、ウルドゥー語を学ぶことによって適切な言葉づかいができるようになる)『教育は重要である(5.

4%)』『家族のためによいことができる(5.2%)』(=家計簿がつけられる、家族の健康により気をつけることができるようになる)というような答えが返ってきた。

【評価調査の結論】

成人識字プロジェクトの評価調査の結論として、次のことが挙げられる。

有効であった戦略

①先生の家が識字センターとして使われたこと。

女性が識字センターに通うためには家族の同意が必要である。識字センターが近所の顔なじみの女性の家ということであれば、家族の同意が得やすい。

②先生や他の学習者と知り合いである。

①と同様で「近所の〇〇さんも行っているのなら」ということで、参加することに対し家族の同意が得やすい。

③識字センターは無料である。

教科書代や授業料等がいらないうことで参加しやすい。

プロジェクト向上への提言

①勧誘の方法として強調できることは次のようなことである。

今回のプロジェクトの場合、職業訓練が受けられることを動機づけに使っていたにもかかわらず、職業訓練は行われなかった。したがって、前述の調査結果で得られた回答を参考に、識字センター参加への勧誘の方法として有効と考えられるのは、例えば、生活面での教育の便益を強調することである。

- ・読み書きを学ぶことは、家族特に子どものためになる。
- ・読み書きを学ぶことで、自尊心と自信を持って他の人と接することができるようになる。
- ・家事などを効率よくこなすことができるようになる。

②対象者を15歳から40歳と40歳以上の二つのグループに分け、二段階策をとる。

15歳から40歳のグループを第一ターゲットとし、集中的に識字教育を行う。なぜなら若い世代は短期の学習で成果をあげることができるため、比較的短い時間で識字率を大きく引き上げることが期待できるからである。識字率をある程度引き上げた後、第二グループの年齢層を対象にプロジェクトを行えばよいのではないかと思われる。

③識字センターを修了した後、識字の能力を維持するための機会の提供が必要である。

識字センターを修了した後に読み書きすることがあるか尋ねてみたところ、「あまりしない」と答えた人が20%もいた。我々もそうだが習ったことは、使わないと忘れてしまう。読書グループを作ったり、コミュニティで新聞をとって回し読みをする等、何らかの取り組みが必要であると感じた。

まとめ

パキスタンは政治的・宗教的に非常に難しい国である。前述の通り政権交代が頻繁に起きているし、政策に対する宗教の影響が強い。つまり、政府が長期的な視野で計画をたてても、実施が困難となる。また、パキスタンにはインドのようなカースト制度はな

いものの封建色が強く、上下関係・権力関係がはっきりしている。国会議員の多くが大地主であり、このような人が自分の特権が脅かされるようになるかもしれないので、貧しい人や非識字者へ本当に教育の機会を提供する気持ちがあるのかについては、疑問符がついた。

パキスタンにおいて、親が子どもに教育を受けさせることの重要性の認識は高まっているが、女性の教育に対する反対は根強い。その理由としてしばしば『イスラム教』の影響が挙げられるが、隣国イランもイスラムの国でありながら、識字率は男女ともに高く、女性も70%を越えている。したがって、パキスタンで女性の識字率が低い原因が『イスラム教』にあると単純に言い切ってしまうことはできない。日本も女性教育に対する意識が低かったが、状況は変わってきた。ということはパキスタンの状況も今後、変わっていく可能性は十分にあると思われる。時間はかかるかもしれないが、少しずつ努力を重ねていかなければならないのだと考えている。

その意味で、識字社会への移行のために意識を改革していくことが必要である。現在のパキスタンでは、大人のうち半分は読み書きができないので、自分が読み書きができないからといって、取り立てて恥ずかしかったり、困ったりすることがないかもしれない。「私もできないけど、あの人だってできないし・・・」といった気持ちが人々の心のどこかにあるかもしれない。ところが、もしも100人のうち99人が読み書きができて、自分ひとりができないと言うことになれば「恥ずかしい」と強く感じたり、また読み書きが出来ないと生きていけないような社会であれば、何がなんでも識字を学ぼうという気になるであろう。同じことは、子どもの教育についても言える。村のなかで、5～6人しか学校に行っていない状況であれば、「うちは貧しいから無理して子どもを学校にやる必要はない」と親は考えるかもしれない。しかし、村の中で学校へ行っていない子どもが非常に少数であれば、「うちの子だけ行かせないのはかわいそうだ。無理をしても学校に行かせよう」と親は思うであろうし、子どもも「学校に行きたい」と親にせがむであろう。社会全体を『識字が必要な社会』『みんなが読み書きができる社会』へと変容させていくことで、「みんなが読み書きできるんだから、私もできないといけない」という周りからのプレッシャーを感じ、学校や識字教室へ通う人が増えるであろう。ひいては、識字率・就学率が上がっていくのではないかとと思われる。

最後に、教育のレベルが向上し、多くの人々が新聞を読み、テレビを見て、インターネットを使うことなどで世界各国の情報を手に入れることができるようになる。そのことによって、政治への関心も高まり、自分たちの社会が抱えている問題点に気づいてくるだろう。そうなると、選挙で大地主ばかりでなく、貧しい人の代表や、女性の代表が多く選出される日も来るだろう。経済的な発展とともに、教育のレベルが向上し、パキスタンが真の民主主義国家となることを望んでいる。